

陳舜臣さんを語る会通信

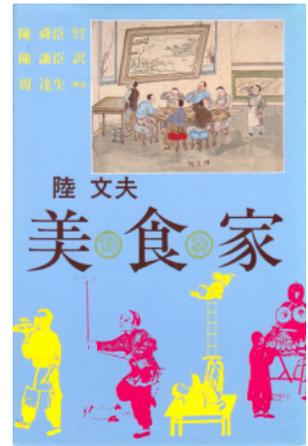
NO.124 Aug. 2024

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2024年8月1日
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

陸文夫作、陳舜臣監訳・序文、陳謙臣訳、周達生解説 『美食家』

本号では、陸文夫作、陳舜臣監訳・序文、陳謙臣訳、周達生解説『美食家』（1987 松籟社）を取り上げました。

「訳者あと書き」より抜粋・引用



松籟社版の表紙

本書は、料理や食することが終始一貫して描かれている。食の化身ともいえるべき人物の朱自治を中心に、主人公の高小庭やその周辺のひとびとの多難な運命とこれを演出する解放前から最近までのさまざまな社会変動を、蘇州の風物を背景に歴史的事実にそわせてリアルに描いている。

本書はいたるところ現在の中国の抱えている問題、すなわち、官僚主義・コネ優先・劣悪なサービス・共稼ぎ・独生児などについて描かれている。インテリ幹部の苦悩と反省をあらわし、かつてのソ連にたいする盲信に、現今のアメリカをはじめとする西側社会にたいする盲従にも疑いの目をむけている。

インテリ幹部・高小庭の反省として、解放され裕福になった大衆が、自分たちが打倒したブルジョアの考えに似てくる人間をすべて「階級」に分けて考えてきたのは、あまりにも教条的ではなかったかと問いかける。

本書に描かれているのは、ごく普通の中国人の境遇である。インテリの高小庭、

ブルジョアの朱自治、プロレタリア労働者の阿二、現代の若者を代表する包坤年らと、解放当初より数々の運動をへて文革・四人組時代から解放政策をとる現在までの近・現代史との関わりを描いており、その意味で本書は食文化への興味のほかに、解放時より近年までの中国人の生活感情を理解する一助になりえると思われる。

舞台並びに時代背景

周達生氏の「解説」から抜粋・引用します。

『美食家』は蘇州を舞台に、伝統的民俗、特に蘇州の名菜という食文化を借りて書かれた小説でフィクションなのである。単なる「虚構」であると著者も小説の最後のところで「付言」を記しているが、これはやはり一種の「傷痕」文学なのである。「反右派闘争」「大躍進」「三年連続の災害年」「四旧打破運動」「上山下乡運動（いわゆる「下放」）」「文化大革命」などが、それぞれの時代を通じて、朱自治に対するもう一人の主人公である「私」つまり高小庭によって語られている話が、「傷痕」以外のなものでもない。

『美食家』の著者は、この概説した中国社会の変化に対応させ、主人公たちを動かす、ストーリーを作っている。「美食」に関連して人びとは動いていくのであるが、長かった悪夢のような動乱の時期だけでなく、今日の軽薄な社会的風潮

に対しても、ある種の批判精神が働かされているように読みとれる。「傷痕」文学以上の配慮が、そこにあるように見受けられた。



陸文夫
りくぶんぶ
Lù Wénfū
(ルーウェンフー)
1928~2005

【陸文夫自伝】 江蘇省泰興県の辺鄙な農村に生れる。祖父は農民、父は商人であった。商人の父が金を稼ぎ、農民の祖父が田畑を買って小地主になっていた。第二次世界大戦終了後、蘇州に引っ越した。それから、蘇州が第二の故郷になった。1959年、塩城の華中大学卒業後、革命に参加、同年、故郷に戻り新聞記者に。28歳で専業作家になった。主に中・短篇小説を書いている。内容が蘇州の街の市民の生活であったので、理論家によって市民文学と称せられた。自分ではリアリズム文学だと考えている。

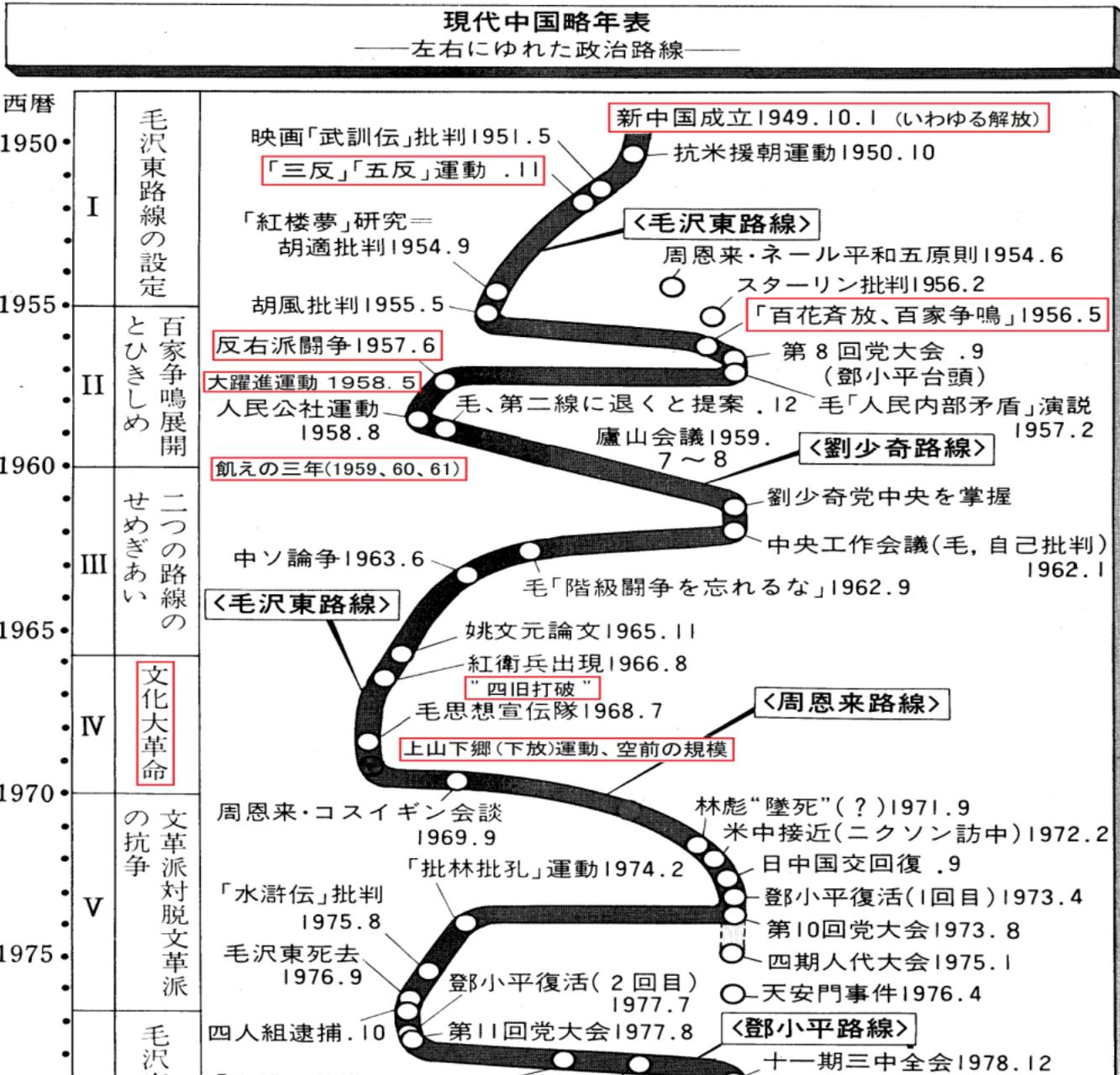
【創作談ー希望】

創作は、一種の芸術的発露であり、魂の叫び、喜び、嘆きである。理性の追求、迷い、発見である。あらゆる人がもっと幸福に暮らせるように望むことである。

55年、元娼婦を主人公にした『横丁の奥で』を発表。57年、「右派」とされた。文革後、庶民の生活を描いた作品を数多く発表、主著『美食家』。

『美食家』 時代背景詳説並びにいくつかの補足

『美食家』は、表面的には、記者・陳謙臣さん言うところの「食の化身」朱自治の食生活が、時代とともに、どのように変化したか、せざるを得なかったか、それが見所です。時代とは、解放（中華人民共和国成立）前から、文化大革命後までの、ほぼ40年間です。下の略年表で確認して下さい。朱四角は、作品中に記述がある出来事です。



陸文夫、57年、右派とされる
人々の目には、〈百花斉放、百家争鳴〉は一種の〈自由化政策〉と映り、民主諸党派の指導者および知識人・学生たちが、中共の政策に異を唱えはじめた。これに対する締め付けが反右派闘争であった。

陸文夫は、48年に革命に参加した経歴を持つような人だが、この時（反右派闘争期）は右派とされ、58年、64年に下放されている。

「傷痕文学」とは？
周達生氏は『美食家』「解説」で、同作品について、
「傷痕」以外のなものでもない。
∴。「傷痕」文学以上の配慮が、そこにあるように見受けた。
と記しておられる。ところで、「傷痕文学」とは何かについて、簡単に触れます。
「四人組」失脚後、思想解放の叫びの高まりに伴って、文学創作において、「文化大革命」を徹底的に否定すること、それが「傷痕文学」の精神的精髓であった。その名は、盧新華の文革中の知識青年の生活を題材にした短編小説「傷痕」に由来する。維基百科で傷痕文学の代表作を見ると、私を知っている作品では、一九八一年発表の古華著『芙蓉鎮』があります。

『美食家』 章立て及び登場人物ほか

『美食家』各章内容

《一 飲み食い小序》《二 われに関する》「なんと、この食べ好きで一家を成した男が、四〇年間も異様な影のように、わたしの身边につきまとったのである」と、まず、美食家・朱自治とわたしの関係が記述される。続けて、朱自治が、家賃の集金さえ代行業者任せの不動産資本家であると説明される。

当時、わたしは高校生で、朱自治は三〇まぎわのころだった。

ここで、美食家的一天、つまり、朝食、茶楼、昼食、フロ屋、夕食の様子が、それぞれ詳細に語られる。

《三 愉快的誤解》1949年になっていたが、まだ新中国の成立前で、高小庭は赤軍の学生兵として蘇州の解放区にいた。ここで、若いインテリの卵である学生兵たちに仕事が分配された。まず、親友の丁大頭の行き先が新華書店と決まり、高小庭は蘇州のある飲食店の商業業務となった。

「二度と朱自治らに、寄生虫のようなただれた生活をつづけさせてはならない！ お前さんのその手で火をおこさせて食べる物をつくらせてやるぞ。それから、阿二にも車はもう引かせはしない、自分の足が二本ついているのだ、当然あるけるはずだ」

《四 鳴り物入りの攻撃》全業種が公私合営化されたとき、当局側の代表として「わたしも、さる有名な料理店に支配人もしくは店長にあたる"経理"として派遣されるはめとなった」。「経理」となったわたしは、門前のネオンや色彩灯をはずし、小部屋をなくして座席を増やし、メニュー、値段を大衆向きにし、労働者階級が訪れやすくなった。

従業員のなかに包坤年という、給仕の年期のまだあけぬ若者がいたが、彼が、徹底的に改革すべきと、わたしのやり方を支持してくれた。結果、改革案は進められたが、一方、腕のいい料理人は辞めていった。

《五 危機を脱する》改革政策は進められたが、朱自治は、「アヘンもやらずバクチもうたず、女郎はなおさらのこと興味なかった。食べ好き以外のことをやったことがなかった」ので、「三反五反」も彼の身にはかすりすらしなかったのだ。しかし、朱自治が困ってしまったのは、彼の舌を満足させる蘇州の名菜が消えさったことであった。朱自治はだんだんしょぼくれ、立派だった太鼓腹もしぼみだした。

そんな朱自治についての情報が入ってくる。一貫して女色に近づけなかつた彼が、石づくりの扉の邸宅の奥で孔碧霞という四〇過ぎの女性とその娘と一緒に暮らしているというのである。彼女はある政客の妾だったが、その政客は解放前夜に別れも告げず、香港へ逃亡した。朱自治が彼女と住むことになったのは、彼女の料理の腕にあった。朱自治はいまや、別天地に閉じこもっているのだ。

主な登場人物

●朱自治(ツウツイーエ) 不動産資本家。父親は、やり手の不動産業者だった。抗日戦争前に上海で手びろく不動産取引所をひらき、上海に邸をかまえ、蘇州にぼう大な財産を買いおいていた。朱自治は蘇州の財産を受け継いだ。一九二〇年代末期の二階建て洋風建築に住む。



●わたし(高小庭 カウシヤウテイ) 狂言回し。著者の分身。共産主義に傾倒、新中国成立前の解放区の経験を持つ。抗日戦の終わりごろ父が亡くなったあと、母と一緒に親戚筋の朱邸に引っ越し、洋風建築の前の平屋の一部屋に住み込む。部屋代を納めないかわりに、朱家の門番を兼ね、母が朱自治の家事まかないを手伝うというきまりになっていた。「わたしは朱自治を知ったのは彼の三〇まぎわのころだった」それから、「四〇年来かれは食の化身となり、まるで妖怪のごとくわたしにまつわりつき、わたしの一生を決定し、知らぬ間にわたしの職業をきめてしまった」



美食家朱自治の一日

【朝食】 朱自治の一日は、「はやく朱鴻興へ行って頭湯麵を食わねば！」というところからはじまる。月極めで雇っている阿二の引く人力車に乗りこみ、麵屋・朱鴻興へ向かう。朱自治は、何杯もの麵を通した麵湯くさい麵を食べる気がしない。頭湯麵、つまり、いちばんそばでないと一日気分がすぐれないのだ。あと、【茶楼】【昼食】【フロ屋】【夕食】というのが朱自治の一日である。



■『美食家』は1985年、上海映画製作所で徐昌霖監督により映画化されました。上の人物、右は朱自治を演じた夏天、左は高小庭を演じた王詩槐です。

『美食家』 章立て及び登場人物ほか(2)

《六 人間の味覚》改革を始めてまだ一年あまりしか経っていないのに、「われわれの料理店が、料理の質が劣り品数もすくない、サービス態度も劣悪だという! しかもそういう人間の九割以上がブルジョア階級でなかった。幹部に労働者、それに爺さん婆さんまでがそうだった」「ここ二年、国民経済がおおいに発展し、農村では連年の豊作、労働者に号俸が定められ幹部には給料が支給され……その人民幣もずいぶん使いがいがあり、…」

1957年春、新中国成立から「あつという間に八年だ、…」この間、比較的順調に経済は成長、人々の暮らしはよくなった。「ブルジョア階級とプロレタリア階級の味覚には、まったく区別がないってことさ!」

《七 南瓜の類》「(解放から大躍進に入るまで、)あの五〇年代の健全で楽しかった年月」は、大躍進の失敗と自然災害で、人々は"飢えの三年"(1959、60、61年)を過ごすこととなった。朱自治たちは別天地に籠もって食三味の生活を楽しんでいたが、食材がなくては孔碧霞の腕も振いようがなかった。そして、仲のよかった朱自治の家族にも亀裂ができた。

かつて、朱自治の人力車引きだった阿二は、わたしの口ききで、「川ざらい」からはじめ、いまや、輸送センターの労組委員長をしていた。その阿二が、仕事の関連で多量の南瓜を手に入れ、わたしに、大八車いっぱい分の南瓜を都合してくれた。そこへ、突然、朱自治が現われ、「カボチャ…、少々お分けねがえませんか」

《八 行きつくところは同じ》"飢えの三年"が去った。「1963年から64年の品物の出まわり方は大躍進まえとほとんど変わらなくなった」。わたしは過去の改革に反省をくわえ、上層部からの指示もあって、高級料理もメニューに加えた。それから数年、時代は文化大革命期となり、この措置や南瓜のことなどがおおきな災いの種となった。あろうことか、朱氏と同じ側の人間として、「わたしは資本主義をあゆむ"走資派"とされ、朱氏は"吸血鬼"とされた。ふたりは首に札をぶらさげて、いっしょに住民委員会の門前に立ってゆるしを乞うこととなった」。わたしをこのような目に遭わせる筋書きは、革命当初、私を支持したあの包坤年が書いたのだ。

《九 士別三日》「わたしは一家をあげて農村へ移住する"下放"をして九年間たった。…。あれこれ考えるなかで五〇歳の誕生日を迎えた。…。災難が過ぎすぎて、わたしはまた蘇州へもどった。こんどはリュックをかついで帰るのではなく、一家全員、老若をたずさえ、農具に家財道具に日用品すべてをトラックに積んでもどってきた」。そして、もとの職場に復帰することとなった。

包坤年が事務所へわたしをたずねてきた。なんとも気まずい表情を顔にうかべ、「高経理、わたくしは…以前、あなたに申しわけない…。わたしは包坤年を受け入れ、「わたしの思想もかつての束縛から解放され、なにごととも一刀のもとに切り捨てるようなことはしなかった」。かつて、わたしたちの店を去って行った名コック・楊中宝との不仲も水に流し、講義をしにきてもらいたいと招請した。この企画は好評を博した。

《十 食通秘伝》楊中宝に続いて、朱自治を講師に招いた。「朱氏は連続して三度われわれに講義した」

《十一 "口福"浅からず》朱自治の邸を会場に、調理学会設立祝賀の宴が開かれた。朱自治が指揮をとり孔碧霞が腕をふるい、包坤年たちも、何日も前から準備にかけずりまわった。

「朱氏は『料理を出して!』と大声で叫んだ。このひと声につられて、みんなはいっせいに池の南側へ目をむけた。…。孔碧霞の娘、あの美人の姑娘が両手に盆をささげもって、かなたの竹林に現われるのがかすかに見え、なんとも見え隠れしながら石橋のたもとまで来た。彼女の歩く姿はいかにもしなやかで美しかった。橋上の人、水中の影、手中の盆、盆中の饌、それらが客たちの方へ軽やかな風のようにひるがえってきた。あたかも月宮の料理店から、現代の仙人がひらりひらりと舞い降りてきたようであった」

《十二 巧克力》わたしには、朱邸でのお呼ばれがあった同じ日に、もう一つ宴会があった。それは、阿二の息子の結婚披露宴で、会場は阿二の家の前庭だった。この披露宴には、わたしの一家も、満一歳になったばかりの外孫をふくめ全員出席した。いまじゃほとんどみんな独りっ子で、ひとりの赤ん坊に六人の大人が、物力と精力をその身に注ぎこむのである。だれかが、口にアメを入れてやったらすぐ吐き出してしまった。「ちょっとチョコレートをやってみようか」。あんのじょう子供は、ペチャペチャとおいしそうによだれを流しながら食べた。「まあ、この子はほんとにかしこいわね、おいしい物を知ってるんだから!」。わたしは突如カーツと頭にきてしまった。よしてくれ、大きくなったらまた美食家か!



包坤年: 盧青



于大頭: 葉志康



孔碧霞: 詹萍萍



左は孔碧霞 右は朱自治

■『美食家』は1985年、上海映画製作所で徐昌霖監督により映画化されました。写真下コメント、登場人物:俳優です。